



Data

監督: 王晶(バリー・ウォン)、关智耀(ジェイソン・クワン)
 出演: 甄子丹(ドニー・イェン) / 刘德华(アンディ・ラウ) / 邓则士(ケント・チェン) / 姜皓文(フィリップ・キョン) / 刘浩龙(ウィルフレッド・ラウ) / 喻亢(ユウ・カン) / 汤镇业(ケント・トン) / 胡然(ミシェル・フー) / 徐冬冬(ラクエル・シュー)

👁️👁️ みどころ

昨年から2020年にかけての香港の民主化デモに対する香港警察の規制(弾圧)は世界の注目を集めたが、1960年当時の香港は?

警察と黒社会との癒着はどの国でも同じ? そうかもしれないが、私がはじめて知った、香港における2人の伝説的な男のワルぶりとカッコ良さは?

それにしても、英国統治下の香港以降の時代の流れを押さえる中で、こんな2人の男の悲哀をしっかりとかみしめたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■時代は1960年。舞台は香港。当時の力関係は? ■□■

中国が2020年6月30日に「香港国家安全維持法」を制定したことによって、米中関係はもとより、かつての香港の領主国であったイギリスと中国との関係が急速に悪化している。1997年7月1日の香港返還が決まったのは、1984年の英中共同声明調印によるもの。日本が土地バブルに浮かれていた最中だから、そんなに昔の話ではない。

私の大学入学は1967年4月。入学直後から学生運動が全国的に広がったのは周知のとおりだ。他方、本作最初の舞台になるのは、1960年の香港。仕事を求めて中国本土の潮州から不法移民として香港に渡ってきたン・サイホウ達が、高額な日銭が得られると聞きつけ、マフィア同士の暴動に加わる姿が描かれる。いうまでもなく、1960年の日本は60年安保闘争で日本中がデモ騒動に明け暮れていた時代。機動隊による東大生・樺美智子さんの死亡が大ニュースになったが、1960年当時の英国領香港におけるヤクザ同士の抗争に対する警察の取り締まりは・・・?

2019年の秋～20年の春における香港警察による民主派活動家たちに対するデモの規制と取り締まりは連日テレビやSNSで報道されたが、1960年当時のその報道は?

■□■2人の伝説的な主人公は?警察とヤクザのつるみ方は? ■□■

警察とヤクザが裏でつるんで、互いに情報交換をしている姿は、韓国映画『悪人伝』(19年)でも描かれていたが、本作の2人の主人公伍世豪(ン・サイホウ)(ドニー・イェン)と雷洛(リー・ロック)(アンディ・ラウ)は実在の有名な人物で、すでに両者とも映画化されているようだ。本作のイントロダクションには、「1960年代の英国領香港時代、警察で汚職が蔓延し黒社会とつながっていることで、市民を恐怖に陥れている時代だった。その時代に実在した黒社会(香港マフィア)のボス、ン・セイホウと香港警察総探長のロイ・ロックをモデルに描いた実録犯罪ドラマが『追龍(ついでに)』である。」と書かれている。

私は返還された直後の香港旅行をしたが、残念ながらその時は九龍には行けなかった。しかし、1960年当時の「九龍城砦」は「東洋の魔窟」と呼ばれ、1949年の中華人民共和国樹立で、中国共産党から逃れた人々がここに流れこみ、行政権が及ばない場所だったことで、薬物売買や賭博など、ありとあらゆる違法行為が行われた無法地帯として有名だったようだ。なるほど、なるほど……。

■力とカネの源泉は？アヘンの威力は？■

ロックの尽力によって、英国人警司ハンター(ブライアン・ラーキン)から身を守ることができたサイホウは、今は黒社会の幹部として、九龍を支配する親分チウ(ベン・ン)のもとで働いていた。このサイホウがわかりやすい直情型の男であるのに対し、あくまで冷静に自分の立場を分析し、警察内部での出世を目指す男がロック。今では考えられないが、本作に見るロックの「英国人警察は絶対に殺してはダメ」という考え方は徹底していた。そのため、これ以上ないと思えるほど男同士の友情を深めていたサイホウとロックだったが、ロックはサイホウに対して、「英国人警察を殺せば俺はお前を撃つ！」と宣言していた。しかして、その宣言どおり、本作ラストでは……？

他方、1960年当時の香港や九龍におけるヤクザの力の源泉はどこにあったの？それはアヘンだ。日本のヤクザ組織の山口組では「麻薬と覚せい剤はご法度！」とされているが、当時の香港や九龍では、ヤクザのみならず、黒社会と結託したロックたち警察幹部もそのうまみの中にどっぷり浸っていたらしい。もっとも、サイホウは、仲間とともに大量のアヘンでぼろもうけをしながら、実の弟には「アヘンは厳禁！」と命じていたから、ご都合主義も良いところだが……。

■黄金の三角地帯を、はじめて見聞！■

1980年代後半の日本の土地バブルは異常な事態だったが、それから10年後の1990年に出版された興味深い本が、村上龍の『Bubble Fantasy あのかで何が買えたか』。その61ページには「黄金の三角地帯のヘロイン1年分を破棄 2000億円」と書かれている。そして、「タイ、ラオス、ミャンマー国境に広がる黄金の三角地帯は世界のヘロイン70%にあたるとも言われるケシの大産地。収穫されたケシは一大集積地であるタイを経由して世界中に運ばれる。タイの大学の調査によると、タイ国内の麻薬ビジネスは20

00億円規模と推定される。これを買って焼却すれば流通するヘロインの量は激減することになる。」と解説されている。

私はこのネタを講義・講演で数回使ったが、残念ながら「黄金の三角地帯」のイメージを具体的に思い描くことはできなかった。ところが、本作後半には、九龍での麻薬の利権を4等分しようとする動きの中、サイホウがいち早くこの「黄金の三角地帯」に出向き、タイの将軍とご対面するシークエンスが登場するので、このケシの大産地をはじめて見る事ができた。もっとも、同書では「タイ国内の麻薬ビジネスは2000億円規模と推定される」と書かれているが、本作に登場するロックの計算では、その利権はそれとはケタ違いに大きそうだったが・・・。

■□■廉政公署の登場は？その役割は？■□■

中国では、本音と建前の使い分けが長い間の歴史の中で定着してきた。TVで観る中国の歴史ドラマでは、ワイロや付け届けは常に見る風景で、それはそのまま日本にも輸入されてきた。しかして、ロックが香港警察のトップである総探長になりながらも、黒社会と癒着し、五億探長（五億ドルを持つ探長）という異名を持っていたのは一体なぜ？

中国では今や習近平の長期独裁体制が固められているが、その権力闘争の政敵として、最初にたたかれたのが薄熙来（ポー・シーライ）や周永康（ジョウ・ヨンカン）だ。習近平が強腕を振るう中で、彼らの“汚職”が次々と暴かれていったが、さてその実態は？

しかして、本作後半には1974年に創設された廉政公署 ICAC（Independent Commission Against Corruption）が登場する。これは、警察官の汚職を取り締まる新たな組織だが、そんなものがホントに機能するの？そう思っていたが・・・。

ちなみに、この ICAC の登場によって、サイホウは1975年に逮捕されたが、ロックはひと足早くカナダに逃亡したことによって、2010年まで生き延びたというからすごい。なるほど、これなら2人とも格好の映画化したい“ワル”になるはずだ。

2020（令和2）年8月4日記

